

【展覧会評】

戦後日本のクラフト・デザインを支えた女性 「中上良子——陶磁器デザイナー・エマイユ作家として」展

2022年8月13日（土）～11月13日（日）
土岐市美濃陶磁歴史館

国際ファッション専門職大学 廣田 緑

1 東濃地方と美濃焼

岐阜県東濃地方には良質な粘土、薪として使用する赤松林、窯に適したなだらかな丘陵と、やきものに必要な好条件が揃っていたため、今日までやきもの産地として、1300年の歴史を守り続けてきた。東濃地方とは岐阜県の多治見市、土岐市、瑞浪市、可児市を指し、おもにこの地域で生産されたやきものは「美濃焼」と総称される。

明治時代以降の大量生産化にとまぬ、製品ごとの産地分業化が進む中で、各地域に特徴あるエリアが形成され、それぞれに技術・文化を受け継いだ製品を作り続けている。たとえば盃の市之倉、徳利の高田、洋食器の滝呂、タイルの笠原（すべて多治見市）、どんぶりの駄知、妻木の美濃白磁（どちらも土岐市）というように、特徴的な生産品をもつ地域が複数ある。こうして東濃地方は現在、和洋食器類の生産量で国内シェアの50%を占めている〔東濃西部広域行政事務組合編2022: 1-4〕。

前述した歴史と背景により、東濃地方には他の地域に類をみない数の陶磁器系美術館・博物館が集中して存在している。多治見市にあるのは、多治見市美濃焼ミュージアム、市之倉さかづき美術館、とうしん美濃陶芸美術館、岐阜県現代陶芸美術館、多治見市モザイクタイルミュージアム、多治見市文化工房ギャラリーヴォイスの6施設。瑞浪市には瑞浪市市ノ瀬廣太記念美術館、NPO 瑞浪

芸術館、瑞浪市陶磁資料館の3施設がある。可児市には荒川豊蔵資料館、可児郷土資料館の2施設、土岐市には土岐市美濃焼伝統産業会館、織部の里公園、土岐市美濃陶磁歴史館の3施設がある。それぞれに地域色、生産品の特徴を生かした所蔵品をもち、企画展示を行っている。

それらの中で土岐市美濃陶磁歴史館は、織部の里公園の東側に隣接し、黄瀬戸や志野、織部といった美濃桃山陶を中心に美濃焼の歴史を紹介している。美濃焼による町興いで観光客が増えている多治見エリアと比較すると、さほど来場者が多いとはいえないが、つねに美濃焼に関する重要な資料、地元作家に焦点を当てた展示をしている。ここで2022年8月13日～11月13日、「中上良子——陶磁器デザイナー・エマイユ作家として」展が開催された。



写真1 土岐市美濃陶磁歴史館
(2022年11月6日廣田撮影)

2 美濃焼を支えた女性陶磁器デザイナー

本展は岐阜県高山出身のデザイナー、中上良子（1932～2005）の仕事を振り返る展覧会だった。昭和20～30（1945～55）年¹⁾代の戦後復興中に、美濃の陶磁器生産に関わった女性デザイナーがいたことを伝える初の展覧会である。そもそも、東濃地方にある美術館・博物館の多くは、陶芸家といわれる工芸色の強い人間国宝や、伝統的流れを継承する職人技を見せるような作品を収蔵し、展覧会を開催している。陶磁器の世界では、大量生産品はそうした一点物よりも下のものとみなされることがあり、陶磁器デザインに特化した展覧会はそもそも少ない。ましてや女性陶磁器デザイナーなど珍しい時代のことである。こうしたことから、本展がいかに貴重なものであるかがわかるだろう。

本展は、中上の陶磁器デザイナー時代、そして七宝と出会いエマイユ作家となった時代、当時の民芸運動とシンクロして美濃地方に生まれたグループ活動という3部門に分けて作品が展示された。本稿では中でも、陶磁器デザイナーとして斬新なデザインを多く生み出した前半の仕事に焦点を当て、自然や生き物に興味をもち、自由な形態描写に行き着いた中上の描写力と、当時の陶磁器業界に

おけるクラフト・デザインの重要性について考えたい。

昭和7（1932）年、岐阜県高山市で生まれた中上良子は、当時岐阜県職員だった父の仕事の関係で中国の大連へ移り住んだ。終戦とともに帰国し、岐阜県立高山高等学校を卒業する。デザインを学んだという記録は残っていないが、高山時代に画家・徳永富士子²⁾から絵を学んだという証言や写真2〔公益財団法人土岐市文化振興事業団編2022: 2〕から、徳永と接した経験が、以降の中上の創作に影響を与えたと考えられる。

高校卒業後、中上は高校教師の推薦によって上絵付けを専門に行う製陶所で、「漆蒔」と呼ばれる技法を駆使した製品を得意とする太洋陶園³⁾に入社した〔公益財団法人土岐市文化振興事業団編2022: 3〕。昭和26（1951）年のことである。ここから陶磁器デザイナーとしての道が始まった。

中上が入社する4年前の昭和22（1947）年1月、戦後の復興の中で、陶磁器業界を再興するため小山富士夫⁴⁾、荒川豊蔵⁵⁾、日根野作三⁶⁾、安藤知山⁷⁾らが加わり⁸⁾日本陶磁振興会が設立された。設立メンバーは全国を回って指導振興にあたり、東濃地方においては、美濃焼のクラフト運動、伝統工芸振興運動も盛んになっていった。当時、振興会の活動で美濃を訪れるようになった陶磁器デザイナー日根野によって、手仕事による陶磁器生産、クラフト・デザインの重要性が説かれた。その時期に、日根野は太洋陶園で中上の仕事をみることとなった。

3 知山陶苑デザイナー時代

全国の陶磁器産地に窯業指導をして回っていた日根野作三を介して、中上は昭和30（1955）年、土岐市下石町の知山陶苑⁹⁾に入社する。ここには陶磁器デザイナーの先駆けだった澤田米三¹⁰⁾、安藤知山、そして日根野がおり、斬新なデザインの製品を増産し



写真2 高山時代、キャンパスに向かう中上
（写真提供：土岐市美濃陶磁歴史館）

ていた。第二次世界大戦後、他のやきもの産地に先駆け、美濃焼は量産化に着手していた。そして昭和 40（1965）年代半ばには日本一の生産量を達成する。この時期、デザインの領域で活躍したのが上記の面々だが、その中に女性がいたことは、あまり知られていない（写真 3）。

知山陶苑で中上がおもに担当したのは銅版転写の文様デザインである。銅版転写とは、陶磁器用絵具を用いて銅版印刷し、紙に刷ら



写真 3 知山陶苑で仕事をする中上
（写真提供：土岐市美濃陶磁器歴史館）

れた文様を器面に転写する方法である。はじめに文様を銅版に彫り込み、そこに絵具をつけて紙に印刷する。これを陶磁器の器面に転写する。転写の方法は写し絵と同じで、印刷面の文様側を素焼きした器面に当て、紙の裏面に湿気を与えて軽く擦り、絵具が付着したら紙をはがすというものだ。美濃地方では明治中期にこの技法が再興し、技術的に改良されたため、量産向きに各地の磁器窯で流行した。[うまか陶のHP より]

写真 4, 5 は中上が知山陶苑でデザインした図案と、生産されたティーセットと茶器セットだ。転写による大量生産品とはいえ、手描きの良さが残る、ぬくもりある器に仕上がっている。写真 5 の銅版転写紙は、それだけで銅版画作品といってもよい圧倒的なデザイン力を感じるだけでなく、四角の画面の中に自然からヒントを得た有機的な形態が緻密にレイアウトされている。日根野が中上の創作に目を留めたのは当然のことだろう。

本展の面白さは、中上の図案と完成品を見比べることができるところにあった。銅版をカリカリと削りながら描いた中上の筆跡を感



写真 4 知山陶苑の銅版ティーセットと銅版転写紙 昭和 30～40 年代
（写真提供：土岐市美濃陶磁器歴史館）



写真 5 知山陶苑の銅版茶器セットと銅版転写紙 昭和 30～40 年代
（写真提供：土岐市美濃陶磁器歴史館）

じることのできる図案と、その筆跡を忠実に残して転写された製品は、単なる機能としての食器ではなく、その表面の文様を存分に楽しむこともできる。

「中上は、動植物や幾何学文、女性などをモチーフにした緻密な文様パターンを得意とし、それらを自ら銅版に彫り込んだ。彫りと腐食時間を自身で調整することで現れる線の強弱やディテールはすべて異なり、版という個性が強く出たものだった」¹¹⁾。このような技術が、大量生産品でありながら職人の手による絵付けのぬくもりに近い仕上がりを生み出している。

中上の陶磁器デザイナーとしてのキャリアは、この時期に開花した。銅版転写の文様デザインのほとんどを彼女が担い、知山陶苑の主力製品となった。中上が手がけた図案による知山陶苑製品は陶磁器デザインコンクールで受賞や入選を繰り返した。

知山陶苑で働きながら、フリーデザイナーとして個人で仕事を受けた銅版紅茶碗皿（写

真7）は昭和40（1965）年頃から関わった香蘭社の製品である。和洋のどちらにも受け入れられる無国籍的で緻密なデザインには、中上の自然に対する敬愛を感じる。中心から外に向かって伸びる花びらや鳶は、愛らしく凛としている。定規で描いたのではない人の手から生まれる描線が、ある規則に則ってひとつの複雑な円となる図案は、藍色とも相性がよく、カップ底の小さな円には遊び心まで感じる。50年以上前の図案でありながら、今もなお新しく見える。

4 安藤七宝店

昭和37（1962）年頃から中上は、日根野の紹介により名古屋の安藤七宝店にデザイン提供を始めた。中上が同店と関わっていた頃には月2度の図案研究会が開催され、所属金工師やデザイナーがもち寄ったデザインを日根野が講評した。この場で採用された図案は、製品化される候補作品となった〔公益財

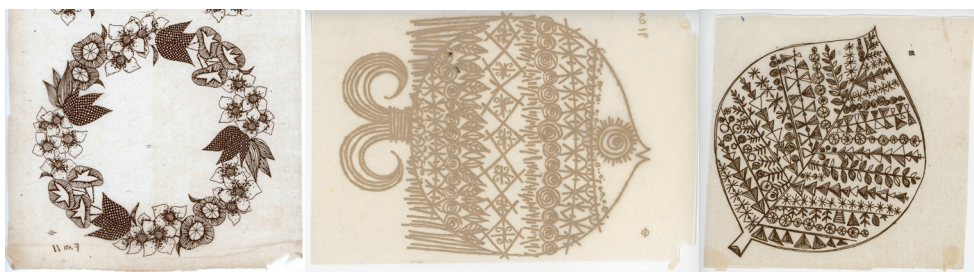


写真6 中上がデザインした銅版転写紙 昭和30～40年代（写真提供：土岐市美濃陶磁歴史館）



写真7 香蘭社の銅版紅茶碗皿と銅版転写紙 昭和40年代
（右 写真提供：土岐市美濃陶磁歴史館）（左 廣田撮影）



写真 8,9 安藤七宝店の七宝花瓶(実物:左)とデザイン図案(右) 昭和 37~42 年
(写真提供:土岐市美濃陶磁歴史館)

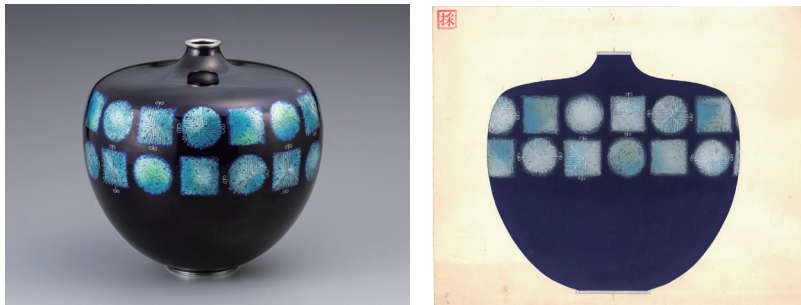


写真 10 安藤七宝店の七宝花瓶(実物:左)とデザイン図案(右) 昭和 37~42 年
(写真提供:土岐市美濃陶磁歴史館)

団法人土岐市文化振興事業団編 2022: 23]。
写真 10 右のデザイン図案左上には、採用が
決まったことを示す「採」の印が見える。

当時、中上が手がけた図案と制作された七
宝作品を見比べてみよう(写真 8~10)。そ
れまでの銅版図案とは異なり、七宝図案の場
合には色の指定もするのだろう。日本画のよ
うなタッチでデザインが描かれている。絵具
の滲みまでが七宝花瓶で再現されており、中
上の図案の良さもさることながら、七宝職人
の技にも驚かされる。

5 美濃クラフト運動

本展を見て印象深かったのは中上に関わっ
た美濃地方でのクラフト運動である。日根
野が美濃地方を訪れて 10 年ほど経過した昭
和 30(1955)年代、彼のクラフト・デザイ
ンに関する思想に影響を受けた美濃地方の作
り手たちが始めたグループ活動に中上も加わ
る。そして昭和 36(1961)年頃に〈みな

の工芸〉、昭和 45(1970)年頃に〈美濃グルッ
ペ泥人〉のメンバーとなっていることが資料
で示された。

〈みならの工芸〉には中上、日根野の他、安
藤光一¹²⁾、加藤仁、加藤嘉明、塚本快示、
中島正雄¹³⁾、沼田一三、羽柴良一、瀬十起夫、
安江賀明が参加。活動は短命だったが、三重
県四日市市の〈セイエークラフト〉とグルー
プ連携する中で、京都の〈走泥社〉とつなが
っていく。ここで興味深いのが〈走泥社〉との
関わりだ。本展に直接関係はないが、陶磁器
が工業製品と工芸品に分かれていく過程で、
昭和 23(1948)年、八木一夫、山田光、鈴
木治ら京都の若手作家によって結成され、日
本における現代陶芸の始まりを位置づけたと
される前衛陶芸集団〈走泥社〉の活動は重要
であり、美濃地方におけるこのような運動の
存在を示した本展は陶芸史を知るうえでも貴
重であった。

〈美濃グルッペ泥人〉は日根野、中上、安
藤光一、安保勇、伊藤慶二¹⁴⁾、加藤静男、

加藤仁、加藤擱也、熊沢輝雄¹⁵⁾、柴田節郎¹⁶⁾、中島正雄、沼田一三、安江賀明の13名で昭和60年(1985)頃まで活動した。日根野が顧問、安藤光一が会長を務め、安江賀明がディレクターとなり作品販売を担った〔公益財団法人土岐市文化振興事業団編2022: 38-39〕。

美濃焼の作り手によるこうした活動は、日根野による影響がもっとも強いと思われる。〈美濃グルッペ泥人〉のひとり、柴田節郎展を企画した多治見のギャルリ百草主宰、陶芸家の安藤雅信は次のように記している。

日根野さんは国の仕事で美濃地方に配属されたデザイン指導者である。その当時、全国に実力のある指導者が派遣された。(中略)その指導は、目の前にある物や形に惑わされず、常に本質を見て考えるというものであったらしい。戦前からのクラフト運動を通して、この地にもクラフトマンシップを持ち込んだ。鮮度の高いイメージを先行させ、技術と素材で裏付けする。綺麗な花を咲かせるには、根っこから考えて作ればいいということだろう。独自性や感性を重視した指導の成果がその後、美濃焼に定着したとは正直思えないが、伊藤慶二さんや柴田節郎さんなど個人の中には今でも引き続き受け継がれていると思う。〔ギャルリ百草のHPより〕

日本の中でも屈指のやきもの産地を有する東海地方にあって、クラフト運動に関わり、戦前からの日本の陶磁器デザインを守った先人について、より知りたいと思わされる展覧会だった。

〈注〉

1) 本稿は戦後の陶磁器デザインの状況を記すものであり、時代を把握するために和暦を併用した。

2) 徳永富士子(大正9～平成21年、1920～2007)は、戦後に飛騨の美術を先導した画家。大阪に生まれ、女学校時代から関西を中心に公募展を制覇し日展に連続入選をするなど、中央画壇で活躍した。師である齊藤与里の取材同行を機に、戦中は高山市を疎開に選んだ。〔<https://www.hidalabo.com/event/256/>〕

3) 太洋陶園は現在も多治見市上町で陶磁器の上絵付けを行っている。

4) 明治33(1900)年、岡山県生まれ。陶磁器研究者でとくに中国陶磁器に詳しい。晩年は岐阜県土岐市に築窯し、作陶生活に入り、昭和50(1975)年没。日本古来の陶磁器窯の中で、中世から現在まで生産が継続されている6つの窯に「六古窯」と命名したことで知られる。

5) 明治27(1894)年、岐阜県多治見市生まれ。大正時代末期から昭和初期まで京都で修行した際に知り合った北大路魯山人に招かれ鎌倉で働く。昭和30(1955)年、志野・瀬戸黒の重要無形文化財技術保持者に指定される〔荒川・熊沢・藤川1986: 189〕。可児市には荒川豊蔵資料館があり、荒川の作品、収集した古陶磁器、陶房が見学できる。

6) 明治40(1907)年、三重県伊賀市生まれ。昭和2(1927)年、東京高等工芸学校(現千葉大学)工芸図案科付属工芸彫刻部を卒業後、京都の国立陶磁器試験所で勤務。戦後にフリーデザイナーとして独立し、京都、信楽、瀬戸、美濃、常滑の陶磁器産地に赴き新たな生活様式にともなうクラフト・デザインの指導に当たった陶磁器デザインの先駆者。民芸運動の中心人物、濱田庄司は「日本の陶磁器デザインの80%は日根野氏がつくられた」と語っている。〔<https://www.cpm-gifu.jp/museum/events/event/event-3034>〕〔<https://teshigoto.club/tsukurite/9268/index.html>〕。

7) 明治42(1909)年、土岐市下石町清水生まれ。昭和22(1947)年に設立された日

本陶磁振興会の主要メンバーとしてクラフト運動、伝統工芸振興運動にも関わった。昭和26（1951）年、新たなクラフト陶磁の担い手育成のため、私費を投じて小谷陶磁器研究所を設立した。[<https://www.toujiki.org/Andou-chizan.html>]

8) 土岐市美濃陶磁歴史館「小山富士夫と美濃」展フライヤーより。

9) 現在は窯元知山窯に改称している。初代安藤知山によって大正9（1920）年に築窯された。知山は昭和25（1950）年、加藤幸兵衛、荒川豊蔵らと美陶会結成、26（1951）年安藤秀二らと美濃上絵付研究所を開設した。日根野を迎え創造性、企画力を活かしクラフト運動および業界発展のため「陶は人なり」と考え沢田米三（痴陶人）をデザイナーとして、五代加藤幸兵衛、荒川豊蔵、安藤秀二らの良き理解者を得てデザイン開発、材料研究、技術開発、後継者育成などを目的に、昭和33（1958）年、小谷陶磁器研究所を設立した。二代安藤光一は民芸の伝統手法を生かしながら新たな表現方法を追求した。[<https://www.chizangama.com/pottery.html>]

10) 明治35（1902）年、京都府生まれ。澤田痴陶人の名で知られる。京都市立陶磁器試験場付属伝習所正科卒業後、昭和9（1934）年有田窯業試験場で陶芸図案を指導、昭和18（1943）年、三重県の佐那具陶磁器研究所に入所し中国陶器研究を始める。昭和25（1950）年、岐阜県知山窯に入る。昭和35（1960）年に佐賀県に移住し多くの窯元へデザインを提供した。

11) 2022年7月6日に行った伊藤慶二への聞き取りによる「公益財団法人土岐市文化振興事業団編2022: 43」。伊藤は土岐市出身。武蔵野美術学校（現武蔵野美術大学）油画科卒業後、岐阜県陶磁器試験場で日根野作三に学んだ。反戦のメッセージを込めた作品群は陶芸領域で評価がされにくかったが、2022年には現代美術画廊として著名

な小山登美夫ギャラリーにおいて86歳での初個展が開催され、現代美術の領域で注目されている。[<https://www.chunichi.co.jp/article/404260>]

12) 昭和9（1934）年、岐阜県土岐市生まれ。昭和28（1953）年、小谷陶器研究所に入所し日根野に師事。昭和47（1972）年、知山陶苑を設立し昭和49（1974）年に走泥社のメンバーとなる。

13) 大正10（1921）年岐阜県生まれ。昭和22（1947）年日根野に師事。個展多数。美濃焼伝統工芸品共同組合初代理事長。土岐市下石町の雅山窯。

14) 昭和10（1935）年、岐阜県土岐市生まれ。昭和33（1958）年、武蔵野美術学校（現武蔵野美術大学）卒業、昭和35～57（1960～82）年、岐阜県陶磁器試験場（現岐阜県セラミック研究所）デザイン室で勤務した際に日根野に師事。70年頃から多治見市意匠研究所で講師を務める。（～2000年）[<https://momogusa.jp/temp/temp2022/tsuchikarahaeru-itokeiji/>]

15) 大正8（1919）年、岐阜県生まれ。昭和14（1939）年、京都高等蚕絲学校（現京都工芸繊維大学）卒業後、昭和29（1954）年多治見市意匠研究所に入ったのち、昭和42（1967）年に所長となり陶磁器デザインに携わる。昭和54（1979）年に岐阜県陶磁器陳列館館長となる。[荒川・熊沢・藤川1986: 189]

16) 昭和15（1940）年、岐阜県多治見市生まれ。昭和32（1957）年に岐阜県多治見工業高校学校図案化卒業後、土岐市立陶磁器試験場入所して以降、日根野作三に学ぶ。個展グループ展多数。昭和44（1969）年、多治見に陶房を開窯。「やきもの教室杜の土」を主宰し、1日体験の他滞在型作陶施設も運営する。[<http://morinotuti.jp>]

〈参考文献〉

荒川豊蔵・熊沢輝雄（文）、藤川清（写真）1986『美

戦後日本のクラフト・デザインを支えた女性「中上良子——陶磁器デザイナー・エマイユ作家として」展

濃——日本のやきもの9』淡交社。
公益財団法人土岐市文化振興事業団編 2022『中上良子——陶磁器デザイナー・エマイユ作家として』土岐市美濃陶磁歴史館。
東濃西部広域行政事務組合編 2022『美濃焼のせかい』東濃西部広域行政事務組合。

インターネット資料

うまか陶「やきものの技法 VOL.3 印版(3)—銅版絵付け—」
https://www.umakato.jp/column_ceramic/a_vol03.html 2022年11月22日閲覧。
岐阜県現代陶芸美術館「日根野作三と薫陶をうけた7人」
<https://www.cpm-gifu.jp/museum/events/event/event-3034> 2022年11月26日閲覧。
ギャラリー百草「伊藤慶二展」
<https://momogusa.jp/temp/temp2022/tsuchikarahaeru-itokeiji/> 2022年11月26日閲覧。
ギャラリー百草「柴田節郎展 クラフトとオブジェ 1965〜」
https://momogusa.jp/temp/temp2000/temp-0001shibata_seturo.html 2022年11月26日閲覧。

ひだラボ「徳永富士子展」
<https://www.hidalabo.com/event/256/> 2022年11月22日閲覧。
日本陶磁器センター
<https://www.toujiki.org> 2022年11月22日閲覧。
窯元知山窯
<https://www.chizangama.com> 2022年11月22日閲覧。
知山窯
http://miscella.net/shop/china/intro_chizan.html
2022年11月22日閲覧。
「アートとして見せる陶芸 陶芸家・伊藤慶二さん」
『中日新聞』2022年1月21日
<https://www.chunichi.co.jp/article/404260>
2022年11月22日閲覧。
てしごとクラブ
<https://teshigoto.club/index.html> 2022年11月26日閲覧。
やきもの教室 杜の土
<http://morinotuti.jp/> 2022年11月29日閲覧。